

久しぶりの感想文です。この間忙しかったのと面白い本に出合わなくて……。例えば「羽田圭介」の一ストラップーなんかもこれが芥川賞?? 「火花」もそう思ったけれど……。ただ、羅列的に書いてるだけ?? 読書会でそう言ったら「新人賞はそんなもんよ……。これからが……。」

で、やっと読んだのがこの本でした。

徳川家に生まれた和子が朝廷に嫁ぎその生涯を書いたものです。江戸時代の商人と武士の関係にも似ているとも思った。商人はなんぼあがいても武士にはなれず、武士は商人の富がうらやましくて仕方がない。

徳川家も所詮武将であって朝廷ではない。ここに徳川家の野望が和子を朝廷に嫁がせることで徳川家の未来永劫の安泰を願ったと思う。

ロイヤルファミリーとは外国も日本も考えることは同じだと感じ入った。ロシアのエカテリーナもヨーロッパの王族もしかり。

この人達の贅沢を支えたのは誰なのと言いたい。今の、日本、先が見えない暗さと疲弊した経済……。富の分配はなかなか下々には降りてこない。

宮尾登美子で一番心に残った本は「一弦の琴」だ。これは、ずいぶん昔に読んだ本だが、一弦琴に一途な情念を傾ける生き方に今も心惹かれた。

